

相互成長のためのフィールド形成

大学院生が行った高等学校でのスクールサポートプログラムの実践を通して

Formative field for mutual development

○松山洋輔、足達龍彦、上野ふみ、植村友博、大橋美保、中間有紀、松井由香里、丸谷佳嗣、丸山優子

YOSUKE MATSUYAMA, TATSUHIKO ADACHI, FUMI UENO, TOMOHIRO UEMURA

MIHO OHASHI, YUKI NAKAMA, YUKARI MATSUI, YOSITSUGU MARUTANI, YUKO MARUYAMA

Key words、自己理解、他者理解、自己表現

目的

大学院生が高校3年生を対象にさまざまな体験的ワークやセッション、新しい知見の獲得のための講義を行い、高校3年生のコミュニケーションの幅や視野を広げられるような支援をするなかで、「自己理解」「他者理解」「自己表現」について自分なりに考えてもらうことが目的であった。また大学院生もファシリテイトする立場として、支援者はどのような立場で高校生と向き合っていけばよいか、どのような支援を行えばよいかなど、大学院生自身の支援者としての成長も目的の一つであった。

方法

2011年4月から7月にかけて、計11回、1回100分の講座を、支援者（大学院生）14名、受講者（高校3年生）36人で行った。講座の内容としては毎回様々な議題に対して、支援者1名と受講者6名のグループに分かれての話し合いやワーク、発表をメインに行ってきた。毎回の講座後に支援者と受講生が振り返りとして、授業の感想や支援者が用意した毎回の講座ごとの質問に対して自分の考えを記録してもらった。その記録をもとに、受講者の講座の目的への理解度や支援者の達成度を図り、考察を行っていった。

結果

最終回で行った受講者の講座全体のアンケートの結果としては以下の通りである。

「自己理解」については、他者からどのように思われているのかを知ることのできるワークを通じて、理解につながったという意見が多かった。特に今回は相手を褒めることが中心のワークを行ったため、「自信につながった」などの意見が多く見られた。「他者理解」については、様々なゲストスピーカーの体験談を通じて理解につながったという意見が多かった。特に、ここでは実際体験されたお話を間近で聞くことができたこともあり、「他者の苦しみや考えをちゃんと理解することが難しい」「人と関

わることで初めて知ることがあり、視野を広げることができた」という意見が見られた。「自己表現」については発表の場やセッションする場面が多かったことや、実際に紙を使って考えを物質化して表現するワークを通じて、自己表現について感じるが多かったという意見が多かった。また、講座全体を通して、これによりコミュニケーション力が向上できた、日常のコミュニケーションが増えたという意見が多かった。

また支援者の大学院生も講座の回数を重ねながら、高校生にどのように支援をすればよいかを話し合い、それを実践していった結果、支援者としての話し合いへの介入の仕方が変わった、受講者の成長と共に支援者自身も「自己理解」「他者理解」「自己表現」について学ぶことができたという意見が多かった。

考察

今回は受講者の毎回の記録や、受講生からの直接の意見、受講者の毎回の講座における姿勢を観察することで、受講者の成長や講座の目的を達成できたかを判断する形ではあるのだが、人の話をしっかりと聞いて自分と相手のことをちゃんと知ろうという心構えの現れで、講座中の雑談が減ったこと、また全体的に発表する量が増えたことから目的を達成できたのではないかとと思われる。また最後のアンケートのなかからも「人と接して大事なことが学べる」「他者と自分を知ることが大切である」という意見が多かったため、今回の目的は達成できたのではないかとと思われる。

また支援者も回を重ねるごとに、会議で自分自身を見つめ直し、支援者の在り方を考えていき、講座での話し合いのなかで、受講者のコミュニケーションの幅を広げる発言をすることができたことや様々な受講者への支援が行えたことから、新たな考えを得ることができ、受講者と共に学び、支援者として成長することができたのではないかとと思われる。